21 信夫隠の歌碑・橋供養塔
信夫隠　D−3

旧奥州街道を取場（安達領）から下って境川（安達と信夫の境の川）を渡り八丁目に入ると、地形の関係で信夫の里が見えなくなることから、この辺を信夫隠と呼んでいる。万葉仮名の歌碑があり、これを「信夫隠の碑」という。碑には次のような碑文（歌）が記されている。
『思いやる　心の奥を　洩らさじと　信夫隠しは　袖か袂か』慶応二年（1866）丙寅建之。
また、かつては二本松領との境であり上杉時代には口留番所があった。戦略上重要な拠点で、永久橋を作ることが許されず、木橋は狭く抜け落ちたりして難儀していた。文化年間（1804~1818）に石の永久橋が架けられ、喜んだ地区民により建立されたのが「橋供養塔」である。
信夫隠の碑、橋供養塔とも以前は奥州街道沿いにあったが、現在は耕地整理により立正院の境内地に移転されている。

22 庚申道標
伊藤　G−3

この道標は、松川町字伊藤に設置されている。高さは 1.2m 位で、元の場所は現在の雇用促進住宅の西側の旧米沢街道の端角にあったが、昭和六十年頃に促進住宅建築の際に行方不明となり、ようやく見つけて旧米沢街道の道端の現在の場所に移した経緯がある。文字は「右大もり左つちゆ道」と刻まれ、「宝暦十二年（1762）」の銘がある。八丁目宿場が交通の要所であった往時を偲ばせる道標の一つである。

23 八丁目城跡
愛宕　G−4

松川町字愛宕にあり伊達政宗の曾祖父稙宗によって築城された。標高 250mの頂上に縦30間、横20間の平場と 5 箇所の空堀、7 段の段築など、山城としての形状が残っている。八丁目城は、天文11年（1542）に始まった伊達稙宗、晴宗父子間の戦いである「天文の乱」において戦場となった。最後の城主は、政宗の祖父晴宗の弟実元で、天正 15 年（1587）4 月16日にこの城で死去した。政宗は直前の 4 月7日に見舞いに訪れている。
天正18年（1590）豊臣秀吉の重臣浅野長政は、秀吉の命令を受け、この八丁目城より奥州に検地令を発した。八丁目城は秀吉の奥州仕置で廃城となったが、築城当時の姿を残す戦国時代の山城跡として貴重な遺産である。

24 諏訪神社
諏訪山　G−4

勧請の当初は北諏訪原に鎮座してあったといわれ、享保の初め頃、現在地に遷座している。建御名方命（タケミナカタノミコト）を祀る。江戸時代に本町の大火で類焼し、現在の社殿はその後の建立であるが、本殿正面や両側の壁の彫刻、登り龍と下り龍を配した脇障子の彫刻は欅の木目を生かした傑作である。
明治 12 年に村社に列せられている。参道にある大鳥居には、信州高遠の石工の名が刻んである。また、境内のしだれ桜は、江戸時代初期に伊達政宗に苗をいただいたと伝えられる古木で、県登録の緑の文化財に指定されている。
境内には、本町の「火石」が石尊大権言として祀られている。

25 長澤山常圓寺
水晶沢　G−4

当寺は、米沢市・万用山東源寺の末寺である。約 440 年前の天正 8 年（1581）年 2 月 25 日開創である。信州泉八家の八男、水内郡奈良沢邑の地頭「藤原淳盛」が父「済盛」の霊を弔うために水晶沢に「常圓寺」を建て、亡き父を開基したものである。常圓寺は、かつて小高い所に本堂があり「見附観音」として有名であったが、明治 18 年（1885）の国道工事により、境内の一部が道路にかかり現在地に移転された。古来より、観音信仰の盛んなところで、「カンノンデラ」として名が知られている。境内には新信夫三十三観音（子安観音堂）、第二十番札所のほか、庚申塔や三十三夜供養塔など 25 基の石像供養塔群がある。

26 諏訪山常光院
本町　G−4

諏訪山常光院といい真言宗の寺院で本山は室生寺である。本尊は大日如来である。大同年間（806~810）の創建で、当初は浅川の寺屋敷にあり、その後鼓が岡村の赤浦屋の裏に移転した。正徳 6 年（1716）に現在地に再度移転した。
明治の初め頃まで諏訪神社の別当職を継承していた。昭和 49 年に宿願であった本堂庫裡を建立し現在に至っている。
境内の一画に享保 2 年（1717）に建立された 5 尺 8 寸の大きな石仏坐像の野地地蔵尊が祀られている。後三年の役で戦功のあった野地家の戦没諸霊と先祖代々の菩提を弔うために建立したものである。また、本堂内には木彫りの立像で 6 尺 2 寸もある延命地蔵尊が安置されている。

27 天龍山盛林寺
本町西裡　G−4

天龍山盛林寺といい曹洞宗である。本山は、大本山永平寺と大本山総持寺、本尊は釈迦牟尼仏である。当山は言い伝えによると、坂上田村麿が愛宕勝軍地蔵菩薩を祀り、寺院を関谷の高鳥谷地区に建立したものらしい。天正 20 年（1592）伊達政宗が 26 歳のとき盛林寺を再建、天和 2 年（1682）幕府の命令で八丁目鼓ケ岡村本町西裡の現在地に移転した。
明治時代になり、松川小学校として使用されたり、松川村の役場が置かれたりしていた。廃仏毀釈の時代近隣の神社との関係が深かったため残ったものと思われる。

28 唯称山常念寺の石碑
中町　G−4

唯称山常念寺という。本尊は阿弥陀如来である。当寺は、壇頭の本陣桜内家の祖、桜内対馬守の建立で、同家墓地の石碑に『元和 9 年（1623）4 月 1 日没、「唯称院浄誉清意居士」常念寺開基、桜内対馬守』と刻してある。先祖は関ヶ原の戦いで豊臣方に加わり、その後北上し、当地を居住地としたと思われる。境内には「南無阿弥陀仏」と異なる字体で彫られた高さが 2.3 メートルを超える 3 基の石塔があり、県北地方では珍しく大きな石塔である。また、像の高さが 1 メートルの十一面千手観音が祀られている。

29 馬宿赤浦屋跡
本町　G−4

馬宿「赤浦屋」は、八丁目宿の中央部にあり、鈴木家が営んでいた。馬宿は、馬が泊る宿であり、馬を連れた旅人も一緒に泊ることになる。街道沿いに点在していたが、普通の宿に比べ数が少なく、八丁目宿では隣家の鈴木家本家との 2 軒だけであった。赤浦屋は、間口 7 間、奥行きが 12 間あり、入り口から奥まで見通しができる広い馬屋となっていた。12 頭の馬をつなげる内馬屋で、馬喰の寝場所は馬小屋の上か中二階が普通であった。
昭和 45 年に川崎市の日本民家園に移築され、神奈川県の重要文化財に指定されている。福島市の文化財保存（民家園建設）のきっかけとなった出来事でもある。
写真は、川崎市日本民家園に移築されたもの。

30 中町稲荷神社
中町　G−4

由緒、勧請年月日は明かでない。明治 11 年（1878）の神社明細帳によると、祭神は、稲倉魂命（ウガノミタマノミコト）及び級長津彦命（シナツヒコノミコト）=（別名）級長戸辺命（シナトベノミコト）の合祀である。また、京都伏見稲荷神社の御分霊とも云われている。初めは西舘（八丁目城）の城下、稲荷に在ったものを、明治 33 年（1902）9 月に現在地に遷座したものである。社格は村社で八丁目三稲荷の一つと言われる。
境内に、明治天皇のご巡幸記念碑及び、中町の交差点から移設した道路元標がある。

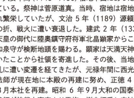
32 めがね橋
天明根　H−4

正式名称は松川橋といい奥州街道の水原川（旧松川）に架かる。アーチ型の橋が水面に映り円く見えることから「めがね橋」と呼ばれている。県令の三島通庸により、福島の信夫橋が十三めがね橋として建設されるのを見た戸長杉内省三郎らが、松川にもめがね橋を架けようと日夜奔走し、明治18年（1885）8 月に完成させた。空石積工法と呼ばれる石積み工法により、半円状に切り石を積んだものである。石材は、信夫橋にも使用された石と同じで、松川町浅川の五斗内（現在の悟桐内）から切り出したものである。
昭和30年代の河川改修により、横に新たな橋が架けられたが、地元の熱意により現在の形で残された。今も、現役の橋として使用されている名橋である。

33 平舘跡
平舘　H−4

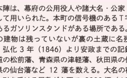
相生集（二本松藩の公式文書）に「八丁目東中西の三塞を築いた」とある。西舘は八丁目城のことであり、東舘は清野備前守が隠居した土合舘である。そして中舘が向町の東の方の平舘である。三つの舘の中では最も早く造られている。
南北朝の頃、平舘に住んだ大竹和泉は当地方の豪族で、南朝方の北畠顕家に味方して活躍した。
現在は、耕地整理等により舘跡を感じさせる名残りはないが、写真中央の看板のある辺りが舘跡と言われる場所で、「平舘」という字名が残っている。

34 天満天神宮
八丁目　H−4



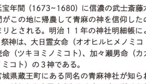
久安年間（1145~1150）宿地本西にあったと伝えられている。祭神は菅原道真。当時、宿地は宿地千軒といわれ繁栄していたが、文治 5 年（1189）源頼朝奥州征伐の折、戦火に遭い衰退した。建武 2 年（1335）後醍醐天皇の御代に陸奥鎮守府将軍北畠顕家からこの地の大竹和泉守が検断地頭を賜わる。顕家は天満天神を信仰していたことから社領を寄進した。その後、当地は幾多の戦乱に遭い変遷を経てきたが、元禄年間に西光寺住職秀永法師が現在地に本殿の再建に努め、正徳 4 年（1714）3 月本社を再建。昭和 6 年 9 月大和の国泰楽寺の忍憧律師が筑紫太宰府より飛梅一樹を拝受し奉納した。現在の飛梅は 2 代目。明治の神仏分離令により神社天満宮となったが、江戸時代八丁目の匠が造った鰐口は今も大切に保管されている。

35 八丁目宿本陣跡
本町　G−4



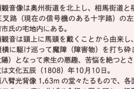
本陣は、幕府の公用役人や諸大名・公家・旗本の宿として用いられた。本町の信号機のある T 字路の東側にあるガソリンスタンドがある場所である。宿場町時代の建物は残っていないが裏の土蔵に名残が見られる。弘化 3 年（1846）より安政までの記録では、北海道の松前藩、青森県の津軽藩、秋田県の佐竹藩、宮城県の仙台藩など 12 藩を数える。大名の宿泊等を一手に引き受ける屋敷が必要で、3000 坪（1 万平方メートル）の敷地があったと伝えられている。
宿泊・休憩の記録や支払金、前日の宿泊地、次の予定地などを記載した宿泊帳が残されている。前日の宿泊地は桑折宿が多く、次の宿泊地の予定は本宮宿が多かったようである。
写真は、実際に使われた各藩の関札で、その一部が県立博物館に保管されている。

36 青麻・粟島神社
青麻山　F−5



延宝年間（1673~1680）に信濃の武士斎藤六右衛門がこの地に帰農して青麻の神を信仰したのが始まりとされる。明治 1 1 年の神社明細帳によると、祭神は、大日霊女命（オオヒルヒメノミコト）、月読命（ツキヨミノミコト）、加々瀬男命（カガセオノミコト）の 3 神である。
宮城県蔵王町にある同名の青麻神社が知られている。どちらも中風（中気とも）の病に効くと伝えられている。中風とは今でいう脳卒中の後遺症による麻痺の症状を指す。この地は南側に開けた丘陵地帯で、境内からの眺望は見応えがある。

37 馬頭観世音菩薩像
石合町　G−5



馬頭観音像は奥州街道を北上し、相馬街道と福島街道の三叉路（現在の信号機のある十字路）の左手前、斉藤清市氏の宅地内にある。
馬頭観音は頭上に馬頭を戴くことから由来し、世界中を縦横に駆け巡って魔障（障害物）を打ち砕き、日輪（太陽）となって衆生の悪趣、苦悩を絶つとされる。
建立は文化五辰（1808）年10月10日。
三面八臂光背像 1.63m の堂々たるもので、各面とも三眼で口をへの字に曲げて忿怒の層を現し、怒髪は櫛の目のようにかたどられ、馬頭がしっかり彫り出されている。朱の彩色を施したあとがあり、建立当時は非常に朱色のきれいな馬頭観音像であったと推察される。

38 六地蔵道標
石合町　G−5

八丁目宿のシンボル的存在。火袋の六面に地蔵が刻まれていることから「六面地蔵」とも呼ばれる。かつては、奥州街道と相馬街道の分岐点にあったが、新しい道路の建設に伴い、南東に移動して現在の場所に移設された。
竿部に「従是南相馬道　従是西　北往還道　元禄八年（1695）乙亥四月八日　信夫郡八丁目町　施主杉内忠兵衛政軌」と彫られていたが、現在では判読不明となっている。高さは 1.6 メートル。
美郷団地から小中学校に通う子どもたちの通学路になっており、安全な通行と健やかな成長を願い見守っている。

39 鞍掛稲荷神社
石合前　G−6

松川町字石合前にあり、稲倉魂命（ウガノミタマノミコト）及び級長津彦命（シナツヒコノミコト）=（別名）級長戸辺命（シナトベノミコト）を祀る。由緒並びに勧請年月日は詳らかでないが、伝説によると、源義家が征東夷の時に境内の石に鞍を掛け兵士を憩わしめて神社に戦勝を祈ったという。その鞍掛石という大きな石が境内に残っている。
この稲荷も八丁目三稲荷の一つである。境内の南斜面には美しい花を咲かせるしだれ桜の古木があり、西郷の狐水稲荷のしだれ桜、本町諏訪神社のしだれ桜と共に「奥州八丁目宿のしだれ 3 本桜」との言い伝えがある。

40 土合舘公園、舘跡
土合舘　H−6

松川町字土合舘にあり東舘ともいう。独立した小山である。築城年月日は詳らかでないが、天文年間（1532〜1554）八丁目城主清野遠江守の父備前守がここに舘を築き隠居したので俗に隠居舘ともいう。備前守は土合舘において死去した。今も空堀や馬出しと思われる広場などに舘跡の名残がある。
昭和 55 年に自然の景観を生かした松川町唯一の都市型公園として完成した。園内の通路にはアジサイが植栽され、松川町商工会が毎年イベントとして「あじさい小路」を開催し、多くの来訪者に喜ばれている。頂上には駒形稲荷神社等がある。

41 天明石・降石
梨木田・降石　H−5

二本松藩が記した「相生集」に、『二個落つ、一つは下川原に、一つはその南の圃中にあり天明石という』と記されている。また、信達一統誌の天明石の項に『奥州街道から三、四丁東に隔てた畑（現在は田）の中にあり、一丁隔てたところにも石があり、これも天明石という。』とある。「漫遊扶桑奇談」によれば、「肥後の国のカラ津という所に、昔、星が落ちて石となり星明神としてまつられている色黒石なりと言えり・・・」と記されていることから、各地で隕石として祀られていたようである。天明石・降石についても隕石の説もあるが定かではない。村の名前も天明根なので星に縁があるのではないか。

42 原十一面千手観世音菩薩
原　D−4

第百六代正親天皇の御代、元亀年間（1570~1573）の頃、尾張の武士中村安秀（中村喜一祖）が、この地に移住する際、秘仏である千手観世音菩薩像を捧持して、原に御堂を創建した。今のお堂には、江戸時代に作られた頭上に十一面の顔が精巧に彫り出された千手観世音菩薩が安置してある。高さ 2.2m、手の幅 1.2m にもなる堂々とした木造の観音像である。
明治初期、新信夫三十三観音第19番札所として、御詠歌に「うち見れば鼓が岡の東なる原のお寺の暁の鐘」と詠まれている。
地域の住民で講中が作られ、毎年 4 月 17 日と 8 月 9 日に盛大に祭礼が行われている。

43 八坂神社
天王原　C−4

松川町字天王原にあり、素戔嗚命（スサノオノミコト）を祀り牛頭天王と称した。明治初期に八坂神社と改称した。
元亀年間（1570 〜 1573）のころ、尾張の武士中村安秀が尾張国津島神社より分霊し祀った。
この地方に悪疫が流行した際、安秀が今の天王山上に土壇を築き、自分が日頃崇敬している牛頭天王に病気平癒を 7 日間祈ると悪疫が終息した。このとき、氏子たちが自宅で採れた胡瓜を奉納したことが習わしとなって現在まで続いている。このことから近在では「きゅうり天王様」と呼んで参拝している。
例祭は 7 月第 3 日曜日で、氏子の当番で御膳献上祭が行われる。

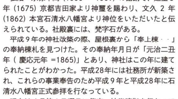
44 愛宕勝軍地蔵尊堂
高森　B−2

関谷地区の最高峰 274m の愛宕山の山頂にある。「盛林寺歴代住職と事績」に「五世安全貞国大和尚元禄 6 年（1693）5 月、関谷愛宕勝軍地蔵堂の別当職」の記録があり、建立は 320 年以前と推測される。明治 30 年代に焼失その後強風で倒壊を経て現在に至っている。堂には、明治 32 年奉納の 3 枚の木札があり、その他元禄 11 年（1698）銘の鰐口、天明 3 年（1783）銘の鋼鐘が奉納されている。堂内の天井には 60 枚の天井画がある。1 枚ごとに寄進者名が記され、関谷地区に限らず、小田・若宮・石合等の地名があり広く、近在から信仰の対象となっていたことが窺われる。現在も檀徒約 40 名が手料理を持ち寄りお堂で祭礼を行っている。
本来の参道は別にあるが、参拝するには金古場側から登るとよい。急な道であるが愛宕山の北側を廻り込むように登っていくと 15 分ほどでお堂のある広い山頂部に着く。

45 薬師堂
高鳥谷　B−3

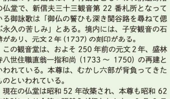
この薬師堂は、高鳥谷部落の守り仏堂で、江戸時代（1603 〜 1868）の建立といわれている。同部落安田博氏所蔵の「薬師如来御堂再興勧化簿」の「勧化序」に次の記載がある。「当村薬師如来御堂、天保 4 年（1833）焼失の処多年再興の志願ありといえども小村殊に打ち続く異作につき空しく年月をおくりますます瑠璃の光明しだいに滅じ尊像安置の処なし・・多少にかぎらず隣村へ助情を乞い求め十方の他力によった志願満たせん事を願うなり　弘化 2 年関谷村願主榮吉」。これにより弘化 2 年（1845）5 カ村、217 名より計 5,888 文の協賛を得て御堂は再興された。

46 八幡神社
中田　B−3



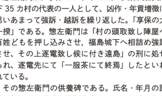
弘治・永禄年間（1555 〜 1569）の勧請で、延宝 3 年（1675）京都吉田家より神璽を賜わり、文久 2 年（1862）本宮石清水八幡宮より神位をいただいたと伝えられている。社殿裏には、梵字石がある。
平成 9 年の神社改築の際、屋根裏から「奉上棟・・」の奉納棟札を見つけた。その奉納年月日が「元治二丑年（慶応元年 =1865）」とあり、神社はこの年に建てられたことがわかった。平成28年には社務所が新築され、これらの事業奉告のため平成 9 年と平成28年に石清水八幡宮正式参拝を行なっている。
現在は 4 月第 1 日曜日に祭事・神輿渡御を行なっている。

47 子安観音
前越　B−3



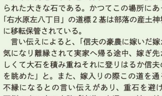
前越の子安観音は、子育観音ともいわれ前越部落の仏堂で、新信夫三十三観音第 22 番札所となっている御詠歌は「御仏の誓ひも深き関谷路を尋ねて償ぶ永久の苦しみ」とある。境内には、子安観音の石碑があり、元文 2 年（1737）の刻印がある。
この観音堂は、およそ 250 年前の元文 2 年、盛林寺八世住職直翁一指和尚（1733 〜 1750）の再建といわれている。本尊は、むかし五大部が背負ってきたものといわれている。
現在の仏堂は昭和 52 年改築され、本尊も昭和 62 年浄財により金箔の張替えが行なわれた。8 月 9 日の祭事は今も行なわれている。

48 義民、惣左衛門供養塔
道下　B−3



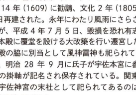
惣左衛門は、享保 14 年（1729）大森代官支配下 35 カ村の代表の一人として、凶作・年貢増徴に思いあまって強訴・越訴を繰り返した。「享保の大一揆」である。惣左衛門は「村の頭取致し陣屋へ百姓どもを押し込みさせ、福島城下へ相詰め強訴させ、その上逐電致し候に付き遠島」の刑に処せられ、逐電先にて「一服茶にて終焉」したといわれている。
その惣左衛門の供養碑である。氏名・年月の記載の無いのは当時の世相を考えてのことだったと思われる。現在でも献花・焼香が絶えない。

49 重石（かさねいし）
重石　B−3



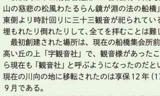
旧米沢街道と水原道の分岐点にある三段に重ねられた大きな石である。かつてこの場所にあった「右水原左八丁目」の道標 2 基は部落の産土神境内に移転保管されている。
言い伝えによると、「信夫の豪農に嫁いだ嫁が病気になり離縁されて実家へ帰る途中、嫁ぎ先が恋しくて大石を積み重ねそれに登りはるか信夫の里を眺めた」と。また、嫁入りの際この道を通ると不縁になるとの言い伝えがあり、重石を避けて、西側の山の中の小路「嫁道」を通って嫁いだという実際の話も聞いている。

50 宇佐八幡神社
神ノ前　B−3



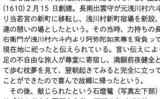
祭神は、誉田別命（ホンダワケノミコト）で、慶長 14 年（1609）に勧請、文化 2 年（1805）8 月 14 日再建された。永年にわたり風雨にさらされていたが、平成 4 年 7 月 5 日、毀損を恐れ有志が集まり本殿に覆堂を設ける大改築を行い遷宮した。
本殿の脇に別当として風神雷神も祀られている。また、明治 28 年 9 月に氏子が宇佐本宮に参拝した時の掛軸が記名され保存されている。関東以北には宇佐神宮の末社として祀られてあるのは当社だけと言われている。
祭礼はで 9 月 29 日に近い日曜日。

51 船橋正観音堂
船橋　B−3



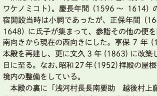
新信夫三十三観音菩薩第 16 番札所。御詠歌「石山の慈悲の松風わたるらん鏡が淵の法の船橋」。
東側より時計回りに三十三観音が祀られているが、埋もれたり倒れたりして、全てを拝むことは難しい。
最初創建された場所は、現在の船橋集会所前の小高い丘の上「字観音社」で、観音様があったことから現在も「観音社」と呼ぶようになったのだろう。現在の川向の地に移転されたのは享保 12 年（1727）9 月である。
本堂には最上流和算宗流派五代尾形貞蔵の算額が納められている。

52 阿弥陀堂
若宮　A−3



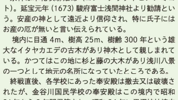
恵心僧都作の阿弥陀如来像が祀られている。慶長15年（1610）2 月 15 日創建。長南出雲守が元浅川村六斗内より当若宮の新町に移転し、浅川村新町宿場を新設、旅人達の憩いの場としたという。その当時、力持ちの長南五右衛門が浅川村六斗内より阿弥陀如来像を背負って運び現在地に祀ったと伝えられている。言い伝えによると、足の不自由な旅人が尊堂に寄宿し、満願前夜健全と立って歩む枕夢を見て、翌朝起きてみると完全に立って歩くことができたので喜んで故郷に帰ったという。
その後、献じられたという石燈篭（写真左下部）があり「献上者大和国願主和助　天明八年（1789）」の銘がある。

53 八幡神社
若宮　A−3



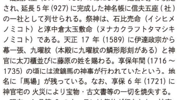
旧浅川新町村の村社で、祭神は誉田別命（ホンダワケノミコト）。慶長年間（1596 〜 1614）の若宮宿開設当時は小祠であったが、正保年間（1644 〜 1648）に氏子が集まって、参詣その他の便を図り、南向きから現在の西向きにした。享保 7 年（1722）本殿を再建し、更に文久 3 年（1863）に改築して今日に至る。なお、昭和 27 年（1952）拝殿の屋根替え・境内の整備をしている。
本殿の裏に「浅河村長長南要助　越後村上藤原信光彫之」の銘のある彫刻がある。寄進者長南要助は当時の名主である。参拝を終えたらぜひ見てほしい。

54 富士浅間神社
神ノ前　B−3



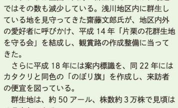
祭神は木花咲耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）。延宝元年（1673）駿府富士浅間神社より勧請という。安産の神として遠近より信仰され、特に氏子にはお産の厄が無いと言い伝えられている。
境内に目通 4m、樹高 25m、樹齢 300 年という雄大なイタヤカエデの古木があり神木として親しまれている。かつてはこの地に杉と藤の大木があり浅川八景の一つとして地元の名所になっていたところである。
終戦直後、各学校にあった奉安殿は撤去又は破壊されたが、金谷川国民学校の奉安殿はこの境内で昭和 21 年から 3 年間保管され、昭和 24 年に黒沼神社境内に「御霊社」として再生された。

55 黒沼神社
木戸前　A−4



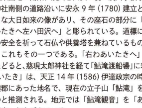
醍醐天皇（897 〜 930）の命により「延喜式」が制定され、延長 5 年（927）に完成した神名帳に信夫五座（社）の一社として列せられる。祭神は、石比売命（イシヒメノミコト）と淳中倉太玉敷命（ヌナカクラフトタマシキノミコト）である。天正 17 年（1589）に伊達政宗から幕一張、九曜紋（本殿に九曜紋の鱗形彫刻がある）と神官に太刀礪並びに藤原の姓を賜わる。享保年間（1716 〜 1735）の頃には流鏑馬の神事が行われていたという。地名に「馬場」が残っている。なお、享保 6 年（1721）に神官宅の火災により宝物・古文書等の一切を焼失する。
現在、4 月第 2 の土・日には祭礼が行なわれ、神事、浅川全地区への御輿の渡御が行なわれている。

56 カタクリ群生地
舘　B−4



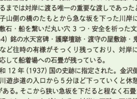
カタクリは全国の山野に群生していたが、最近ではその数も減少している。浅川地区内に群生している地を見守ってきた齋藤文郎氏が、地区内外の愛好者に呼びかけ、平成 14 年「片栗の花群生地を守る会」を結成し、観賞路の作成整備に当ってきた。
さらに平成 18 年には案内標識を、同 22 年にはカタクリと同色の「のぼり旗」を作成し、来訪者の便宜を図っている。
群生地は、約 50 アール、株数約 3 万株で見頃は 4 月中旬である。

57 大日如来の道標
板取　A−4



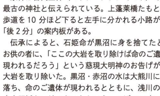
蓬莱団地の南東、浅川と田沢の境の浅川字板取の神明神社南側の道路沿いに安永 9 年（1780）建立という小さな大日如来の像があり、その座石の部分に「右わあいたきへ左八田沢へ」と彫られている。道標は道中の安全を祈って石仏や供養塔を兼ねているものが多く、これもその一つである。「右わあいたきへ」の道をたどると、慈現太郎神社を経て「鮎滝渡船場」に着く。「あいたき」は、天正 14 年（1586）伊達政宗の時代の伊達郡にあった地名で、現在の立子山「鮎滝」を指すものと推測される。地元では「鮎滝観音」を「あいたき観音」とも呼んでいる

58 鮎滝渡船場跡
鮎滝・船場　A−5



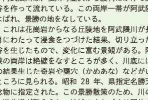
阿武隈峡に架けられている上蓬莱橋の真下に「史跡名勝鮎滝渡船場跡」がある。明治 8 年（1875）上流に蓬莱橋が架かるまでは対岸に渡る唯一の重要な渡しであったという。
立子山側の橋のたもとから急な坂を下った川岸には、石畳の敷石・船を繋いだ丸い穴 3 つ・安全を祈った文久 4 年（1864）銘の水天宮碑・護摩壇跡・渡守の屋敷跡・鬼石・太鼓石など往時の有様がそっくり残っており、対岸にもこれに対応して船着場への石畳が残っている。
昭和 12 年（1937）国の史跡に指定された。金沢側は、阿武隈川遊歩道の入口から 5 分ほど下っていくと休憩所（四阿）がある。そこから狭い急坂を下ると程なく石畳があり、渡船場であったことがわかる。対岸に石碑・石塔等が遠めに見える。

59 慈現太郎神社
壺根淵　A−5



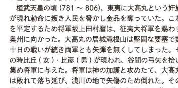
祭神は言代主神（コトシロヌシノミコト）で浅川最古の神社と伝えられている。上蓬莱橋たもとの遊歩道を 10 分ほど下ると左手に分かれる小路があり「後 2 分」の案内板がある。
伝承によると、石姫命が黒沼に身を捨てたとき、お供の者に、「ここの大岩を取り除けば命のご遺体は現われるだろう」という慈現大明神のお告げがあり大岩を取り除いた。黒沼・赤沼の水は大熊川に流れ落ち、命のご遺体が現われるとともに、浅川の地は広大肥沃な田地になったという。干ばつの時、この滝壺の水を払う雨乞いの神事は永く伝わったという。

60 阿武隈峡遊歩道
船場　A−5



阿武隈川は、松川町金沢から渡利にかけて深い渓谷を作って流れている。この両岸一帯が阿武隈峡とよばれ、景勝の地をなしている。
これは花崗岩からなる丘陵地を阿武隈川が長い年月にわたって浸食をつづけた結果、切り立った深い谷を生じたもので、変化に富む景観がある。阿武隈峡の両岸は絶壁をなすところが多く、川底には侵食の結果生じた奇岩や甌穴（かめあな）などがいたるところに見られる。昭和 28 年、県指定名勝天然記念物に指定された。この景勝散策のため、川の西側に遊歩道が整えられ、地域のまちづくり団体が草刈などの活動をしている。

61 田村将軍地蔵堂
浅川地蔵岡・金沢地蔵岡　B−4



田村将軍地蔵堂は、浅川地蔵岡前と金沢地蔵岡に向かい合う形で建てられている。
桓武天皇の頃（781 〜 806）、東夷に大高丸という奸族が現れ勅命に叛き人民を脅かし金品を奪っていた。これを平定するため将軍坂上田村麿は、征夷大将軍を賜わり奥州に向かった。大高丸の居城滝根山は堅固な要塞で数十日の戦いが続き両軍とも矢弾を無くしてしまった。その時出丘（女）・比彦（男）が現われ、谷間の弓矢を拾い集め将軍に与えた。将軍は神の加護と攻めたて、大高丸は敗れて落ち延び、浅川の地で矢傷のため倒れた。その供養のため頭部を浅川の岡に、胴体を金沢の岡に葬った。後に、両岡地は地蔵岡の地名になったという。

62 成田山不動尊堂
丸石　B−3

明治 34 年（1901）に千葉県成田山新勝寺より分霊を受け、護摩堂を建立する。明治 36 年に拝殿を大正 4 年には御厨子を新調し尊像を安置する。その後老朽化のため、昭和58 年改築し、落慶法要をおこなう。別当職は永仁寺が司る。
この不動尊は、交通の神（仏）、学問の神（仏）、農業の神（仏）として信仰を集めてきた。
境内には熊野宮・別雷神・小牛田山神・文殊尊・佐倉宗吾霊碑・その他 3 基など、数多くの石碑や講中碑が建てられている。宗吾碑は、享保の百姓一揆指導者佐倉惣五郎（通称宗吾）の名を借りて齋藤運四郎が建立したといわれる。

63 聖観音堂
平石　B−4

新信夫三十三観音第17 番札所。御詠歌、「浅川の清き流れに清めてし心のそこし塵もほこさじ」。お堂の後に散在していた石仏の三十三観音も、現在は整然と並べ祀られている。
平石菊池家一族の守り本尊という。正平年間（1346 〜 1370）九州の菊池武房の孫武時の子武吉が陸奥に下り、各地を巡歴の末この平石を永住の地と定め、お堂を建て平石の鎮守として崇敬したという。御本尊は一寸八分の金の尊体で、元弘 3 年（1333）浅草観世音の御本霊を賜わったものだと「浅川聖観世音由来記」に記されている。

64 松川事件の碑
小家場　C−4

昭和24年（1949）8 月 17 日の深夜、東北本線金谷川・松川両駅間のカーブで機関車が転覆し、乗務員 3 名が死亡した事件の供養碑と記念碑がある。供養碑は事件後、関係者の間でこの現場に石碑を建てて殉職者の霊を慰めようという声が高まり、機関区員の拠出金などで昭和 25 年 4 月に石碑が完成し、碑の除幕式が挙行された。
また、裁判では、最高裁判所が昭和 38 年（1963）9 月 12 日上告棄却の判決を言い渡し、被告の無罪が確定した。金沢から美郷に通じる跨線橋の北側の真下に立っている大きな記念碑は無罪判決を記念したもので、関係者により記念公園として整備された。

66 金澤山永仁寺
明内　B−4

永仁寺は、永仁年間（1293~1298）、猿田地内に一向宗の猿田山永仁寺阿弥陀堂が建立され、天文元年（1532）に成願上人によって猿田山永仁寺が開山建立された。宝永 3 年（1706）に猿田の大極にあった永仁寺を明内の現在地に移転して転宗し、福島の真浄院の末寺として真言宗豊山派金澤山永仁寺となり、本堂に御本尊の不動明王が安置されている。現在の本堂は昭和 58 年に完成している。
境内に天明の飢饉の餓死被害者の供養のため建てられた「三界万霊無縁塔」や、元治元年（1864）の水戸天狗党の乱により討死した福島藩郷方鉄砲組の墓（根木内斎藤家）もある。

67 黒内舘跡・黒内遺跡
黒内　B−4

黒内舘は、金沢のほぼ中央の字黒内地内の小高い丘にある。4 号国道沿いの芳水の桜付近から北方を見ると写真のような中腹に人家のある丘が見える。文化財保存会の初代会長である渡辺安次郎氏の記した「金沢のむらの謎」の中に「鎌倉時代に伊達家の家臣で地頭職にあった金沢家の屋敷跡であると思われる」と記されているが、正確なところは不明である。
現在、周囲は竹林となっているが、頂上近くに空堀跡と思われる深い溝が 2 条あり、また、頂上部は平坦となっており、舘跡の面影を見ることができる。中腹に熊野神社が祀られており、黒内の加藤家など数戸でお護りしている。その境内には、旧県道沿いの辻にあった馬頭尊が移設して祀られている。
なお、黒内舘周辺は黒内遺跡とも言われており、縄文時代の土器片等も見つかっている。

68 郷方鉄砲組の墓
金沢地内　B−5

▲足尾田　▲根木内

豊臣秀吉の『身分統制令』（天正 19 年＝1591）の制定以来、兵農が分離され、農民が戦争に狩り出されることはなかった。しかし、幕末の混乱期には武士だけで治安が保てず、苦肉の策として農民の鉄砲撃ちを郷方鉄砲組として徴発し、警備や戦役に参加させた。板倉藩でも郷方鉄砲組を組織し、農民 21 名、藩の鉄砲組 11 名の計 32 名で、天狗党の乱（元治元年＝1864）や戊辰戦争（明治元年＝1868）に参戦した。郷方鉄砲組では渡利村 2 名、金沢村 5 名（うち 1 名は戊辰戦争）が討死している。金沢村に 5 名の墓が次の 4 ヶ所にある。
○高根：加藤兵五郎善八、息子清四郎（戊辰戦争で戦死）
○根木内：斎藤与惣右衛門　○足尾田：加藤金次郎
○三合内：丹治三十郎

69 芳水の桜
深沢　C−4

金沢地内の県道福島・飯野線沿いの第八北町公会集会所前の T 字路より南に向かい、福島南バイパスをくぐると左手に見える。樹木より一段高いところに二本の標柱が立っている。
平成 16 年に福島市の保存樹に指定され、標柱には、「樹種シダレザクラ、樹高九・五〇米、幹周二・三〇米、管理者渡邊國郎」と記され、別の標柱には「昭和天皇御即位記念　栽植者第 5 代芳太郎命名　・・・」などと記載されている。第 5 代芳太郎の『芳』の一字を取って「芳水の桜」と名付けられたという。
シダレザクラが沼面に映える姿は駿河湾の逆さ富士にも劣らない容姿で、シーズンには多くのカメラマンが訪れている。

70 永仁の板碑
金沢字立石　C−5

金沢の永仁寺は永仁年間（1293 〜 1298）に建立されているが、この板碑も永仁寺建立と同じ頃に建立されたものと思われる。碑面には阿弥陀三尊の梵字が深く彫り刻まれ、『永仁二二□九月』とある。台石は無く 1 メートル前後ぐらいは埋められていると思われる。
近くの小川の土橋が流失する度に「両面平らなので石橋にしては」と話に出たが、信仰深い村人たちにより、石橋にされずに幾度もその難をまぬかれてきたという。
現在も古浅川（鮎滝の渡し）へ通じる道路の小高い丘の中腹に立っている。

71 川前の観音堂
川前　C−5

川前の観音様は、新信夫三十三観音の第 18 番札所で、本尊は十一面観世音菩薩である。永仁寺が別当となっている。建立は不明であるが、御堂の前に古い五体の墓碑があり、調べると法印様の墓で、延享 3 年（1746）、文化 4 年（1807）の年号が入っている。永仁寺が現在地に移設した頃には観音様が存在していたものと思われる。
境内に数本の桜の古木があり、かつては桜の季節になると花見で賑やかであった。数年前までは春と秋に屋敷の信者が集って祭礼が行われていた。

72 鎮守山蓮泉寺
北　C−5

正暦 3 年（992）3 月開山。第一座主は京都生まれの慶祚大阿遮梨、本山は三井寺である。
御本尊は弘法大師の作と伝えられる不動明王である。永保 2 年（1081）本山より役行者の姿を拝請安置する。文治 3 年（1187）には法螺貝を求め寺宝物とする。
建久 3 年（1192）開山 200 年紀法会を行なう。建保 4 年（1216）、釈迦牟尼如来と黒沼大明神の遷宮を行なう。寛喜 3 年（1231）諸学諸芸に通じた法印宥明講師は村の子弟に読み書きを教え、受講者は35人に達したという。
暦応 2 年、開山300年紀の大法会を 3 月28日より 17 日間、近隣の僧 26 人が参集して行なった。
現本堂は平成元年に改築したものである。

73 黒沼神社
北　D−5

黒沼神社は平安中期の延喜式神帳に記された古社と伝えられる。明治 4 年、神仏分離令により沼袋村の村社沼袋神社となる。明治 5 年村社黒沼神社と改称する。
祭神は欽明天皇后石姫命（イワヒメノミコト）で子淳中大尊を皇太子に立てようとしたが失敗し、母子ともに陸奥国に下って亡くなられたと伝わっている。その途中に休まれた沼袋、金沢、浅川、水原、福島に黒沼神社が祀られ、また山田の大清水には石姫入水の伝承がある。
この神社の杉森は福島市の緑の文化財に指定されている。

74 天鼓雷神堂
日向　D−5

もともとは菅野家（現菅野家の先住者）の氏神として祀られていたものであるが、嘉禄元年（1225）数地内にあった杉の大木に雷が落ちて恐ろしい思いをしたという。そのため当時の橘木内の住民たちが田畑を駆け回った雷神を鎮めるため、堂宇を建て天鼓雷神を祀り信心したと言われている。
現在、天鼓雷神の祭礼は、黒沼神社の祭礼に合わせて 10 月に橘木内屋敷内 14 戸が集い料理などを持ち寄って行われている。
また、天鼓雷神下の参道入口にある弥惣治沼は約 80 年前に修復され現在の形になったもので、沼の弁天様はその前から沼の中央にあり、天鼓雷神様と併せて雨乞いなどの願いを込めて信心されている。

75 妙見堂
日向　D−5

北辰妙見尊は貞応元年（1222）8 月 22 日建立とのことであるが、棟札には安政元年（1854）8 月 22 日造立、天保 14 年（1843）3 月 22 日、嘉永 7 年（1854）3 月 22 日再建とあり、嘉永 7 年に気吹戸主神（イブキドヌシノミコト）、瀬織津姫神（セオリツヒメノミコト）を祭祀とある。
昔、沼袋村は「野馬の袋」と呼ばれ、後陽成天皇の頃（1586 〜 1611）は田地ケ岡城主（現二本松市塩沢地内）の牧場地であって、馬の逃亡を防ぐため番人屋を置き、また日向地内は馬場と呼ばれた地でもある。馬の育成地として城主が妙見尊を建立し、信仰されたといわれている。

76 薬師堂
戸ノ内　D−5

薬師堂は、蚕養童子堂と並んで戸ノ内地内の小高い丘に建立されている。明治初期に記された安達郡の仏堂明細帳によると、「本尊仏薬師如来木造丈一尺八寸、由緒建立は不詳、天保 6 年（1865）5 月再建」とある。近年、本尊を安置していた奥の院の痛みが激しくなり、12 年前に建て替えを行った。
以前は 4 月 8 日に行われていた祭礼であるが、蚕養童子堂と同じく佐藤家が世話人を務めているため、調整して 4 月第 2 土曜日に行われるようになった。
境内には、明治 43 年（1910）建立の千手観音、享保 3 年（1718）の子安観音などの石仏が多くあり、「薬師堂は約 600 年以上前に創建されている」と佐藤家には伝わっている。

77 蚕養童子堂
戸ノ内　D−5

蚕養童子堂は戸ノ内地内の小高い丘にある。明治初期に記された安達郡の仏堂明細帳によると、「得大勢至大菩薩を本尊とし、文化 12 年（1815）に再建」とある。代々蚕養童子堂の世話をしている佐藤家には、生糸の商いをしていた先祖の佐藤七右衛門が養蚕振興のために山林を提供して祭祀したと伝わっている。
本来の祭礼は旧暦の 2 月 16 日であるが、近年は薬師堂の祭礼と調整し、4 月第 1 土曜日に行うようになった。かつては、蓮泉寺の法印により御神体を本殿に遷し、祭礼を行った後、作占いなどのご託宣を受けて、最後に御神体を佐藤家へ戻すことが行われていた。昭和 3 5 年から、宝蔵を作り御神体が本殿に安置され、法印を招いての祭礼のみが行われている。

78 作場稲荷神社
佐久間　D−5

稲蒼魂命（ウガノミタマノミコト）を祀る。勧請は明和 3 年（1766）8 月。
佐久間は昔「作場」と呼ばれ牧場であった。後に、新田が開かれるに伴い「作場」となり、明治以降佐久間という字が当てられたが、神社名は「作場」がそのまま残された。
馬産と農業の振興を図りまた家内安全と部落の発展を祈って京都の伏見稲荷の分霊をいただいて部落の鎮守様として祀ったお社である。
明治 45 年に現在の拝殿が建てられ、彫刻師加藤源太郎の見事な彫刻がほどこされた立派な拝殿である。また安産祈願のため本殿には小牛田神社も合祀され信仰を集めている。

79 熊野神社・熊野舘跡
鍛冶屋　D−5

社伝によれば、天保12 年（1841）の創立と伝えられるが、中世熊野館とよばれた館跡に祀られた古社で非常に規模の大きいお宮である。祭神は、伊弉諾尊（イザナギノミコト）と伊弉再尊（イザナミノミコト）である。拝殿内には安産の神様といわれる小牛田神社も合祀されている。また、この辺一帯は縄文遺跡としても知られている。拝殿正面の左右に一対となった立派な併句の碑が奉納されている。
地名、地形から推測して館跡と考えられるが館主、年代等は明らかではない。現在はその中心であったと思われる所に熊野神社が祀られ南は平地地で北からの攻撃に備えた館と考えられる。

80 金塚牛頭天王社
戸ノ内　D−5

金塚牛頭天王は、本地薬師如来を貞応元年（1222）8 月 8 日当地に祀られた。金塚山頂の古墳の上にあり、長床式の拝殿がある。鳥居もあり一見神社のようである。本社は京都八坂の地にある牛頭天王と思われる。京都には平安時代から祀られており疫病難除けの神として信仰されている。
金塚とは昔鍛冶屋が居住していたようであり近くに鍛冶荒神が建てられている。
当社は疫病難除け予防の神として、また副村社の格で祭礼には黒沼神社よりお神酒が送られ黒沼神社総代・世話人の方も参列して祭典が行なわれている。

81 天満宮碑
越田　D−5

沼袋字越田部落に花崗岩製の高さ約 2.5m の天満宮（通称天神様）と石刻された碑が建てられている。創立者は橋本午之介（明治 2 年没）で、当時庶民の一般教養の場として寺子屋を開設し子弟の教育振興に専念していたころ大勢の筆子有志によって建てられたという。
石刻題字は午之介の自筆によるもので碑の傍らには有志者 175 名の筆子の名が刻まれている。今から百数十年前に建てられたものと思料され、当時の寺子屋教育が盛んであったことがうかがわれる。

82 大山不動尊と雷神
越田　D−6

▼雷神　▲大山不動尊

伝説によると八幡太郎義家が天喜 5 年（1057）千八百騎で安部貞任を攻めたが吹雪や四千騎の強襲にあい数百騎を失い他は離散して僅か六騎となり、現不動尊の下の三畳ほどの平坦地で必勝祈願を行い一夜を明かした。その時ご飯を炊いたと言われる二つの岩のかまどが夫婦釜として残っている。夫婦釜の水は八幡太郎義家の悲憤の涙として現在に伝わっている。干害のときには笹で水を掛け合い雨乞いが行なわれた。そして部落の中央に雷神様を祀った。
後に、義家が戦勝祈願をした当地に吉田市エ門が家内安全、五穀成就の神として祀ったのが現存する大山不動尊であるという。

83 越田大神宮碑
越田　D−6

伊勢神宮に参拝する「お伊勢参り」は、江戸時代後半に大人気となり、明治時代になると交通機関の発達などによりますます盛んになった。しかし参宮するためにはたくさんの費用が掛かることから、伊勢講という仲間を募り、交代で参宮を行った。多くの講中では帰郷後、参宮の記念に地元の神社などに記念碑などを奉納したのである。越田の大神宮碑もその一つで、地区で伊勢講を組織し、昭和 7 年から 13 年にかけて参拝し、記念に建てたものである。後年の伊勢参詣者がその横に建てた天照皇大神宮碑にその内容が記されている。
この場所は、下川崎一円を見下ろせる小高い丘で、桜、新緑、田植えと一年を通して気持ちの良い展望を楽しむことができる。

84 観音堂
越田　D−6

観音堂は、県道飯野線を飯野に向かって左手、墓地の上の小高いところにある。規模の大きな観音堂で、御堂とこもりやに分かれている。お堂には、正観世音菩薩が祀られ、その横に熊野三社が祀られている。昔は、観音堂単独の建物であったが、お堂に建物をかぶせて、横に部屋を増築して現在の観音堂となった。大正 7 年の建築時の寄進明細の板が貼ってある。
お堂の前堂の天井には青く縁どられた見事な天井絵がある。
今は途絶えているが、戦前まではお籠もりを行っていたという。現在でも、正月、蚕様、熊野様、村祭りの年 4 回、道草と久木の 2 集落 1 4 戸がお祭りを行っている。

85 杉森神社の戴澤碑
上ノ内　E−6

杉森神社は、下川崎一円の名主服部家の氏神様として、杉森神社、稲荷神社、八坂神社の三社の御神体を祀り土産神として部落民とともに崇拝してきた。開祀の年月日は不明である。
昔、上ノ内は奥州街道二本柳宿場と相馬中村を結ぶ重要な地点であった。また文化 3 年（1806）以降には下手度藩の参勤交代や藩用の往来が頻繁になり、その都度沿道の百姓に人馬の役務が頻繁になり、農民の役務免除の願いを出し、渋川組代官、郡奉行よりそれが許可された。それを知った村人は感謝して「その恩徳を後世に言い伝えたい」と建てた戴澤碑が境内の裏側にある。

86 八幡神社
坂ノ下　E−6

由緒は不明であるが、勧請は元禄 12 年（1699）9 月 28 日、祭神は誉田和気神（ホンダワケノミコト）である。天喜年間（1053 〜 1058）前九年の役に八幡太郎義家父子と安部貞任・宗任兄弟と戦い、北国の寒い冬の戦いで義家軍は苦戦した。その上敗北して味方はちりぢりばらばらとなり、血路を開いて逃れ集まった者は数騎だったという。ようやく東坂の地にたどり着いた。清水の湧き出ている所を見つけ、義家は近くの桜の木に馬を繋ぎ家来共々清水を飲み、しばらく休息し戦いの疲れを癒した。
後日、この地に八幡神社を祀り桜の木を植えた。今では桜の大木に成長し、毎年春になると薄紅色の花を咲かせている。